

ヴォルフ Wolf<sup>1</sup>の継承者たちの主張を信じるならば、ホメーロスの叙事詩はじつに異常な状態を呈していることになる。フリードリッヒ・シュレーゲル Frédéric Schlegel<sup>2</sup>の言い方によれば、「この作品は着想されて作成されたものではなく、生れた後、自然に大きくなったものである」。この文を構成するそれぞれの語自体の意味は明らかだが、全体として何を言っているのかよくわからない。ヤーコブ・グリム Jacob Grimm<sup>3</sup>の言い方はもっと極端である、「真の叙事詩とはそれ自体生成する。どんな詩人によってであれ書かれたものではありえない」。以前そういうことも一度はあったかもしれないことがここでは箴言になっている。次には、思考が不明瞭になったとき必ず現れる大げさな語が来る。「このギリシャ叙事詩は有機物である」。最後にはこうだ、「力にあふれている」(哲学者シュタインタール Steinthal<sup>4</sup>の言葉)。つまりおそらく外に負うものはなにもなく、自体に発展する力をもっているというのだ。

こうした表現にドイツ語はじつに都合がよい。このような表現には不明瞭のなかになにか高圧的などころがある。ラックマン Lachmann<sup>5</sup>の著作はこうした表現に満ちている。我が国の文学史は五十年も前から、こうした表現を取り入れ、大いに使用した。われわれの先輩を驚かせたこうした表現を、次世代の人々はあまり考えもなく繰り返した。こうした表現によって巻き起こされた長い論議は少しずつおさまり、残ったのはなかばそれに説得された人々である。交すべき新しい考えが尽き、議論は収束したに思われたが、ここ三十年来の考古学的発掘は、再び人々の注意をそこに引き戻した。

---

<sup>1</sup> フリードリッヒ・ヴォルフ 1759 - 1824、『イーリアス』と『オデュッセイア』は時代を異にした叙事詩の断片の組み合わせによって出来たという説を唱えたドイツの言語学者

<sup>2</sup> 1772 - 1829

<sup>3</sup> 1785 - 1863

<sup>4</sup> 1823 - 1899 言語学者、哲学者

<sup>5</sup> 1793 - 1851

ヒッサルリク<sup>6</sup>、ミュケーナイ<sup>7</sup>、ティリュントス<sup>8</sup>でなされた驚くべき発見<sup>9</sup>を前にして、叙事詩的物語が事実であったという証拠をそこに認めようとする動きがあったが、これは一瞬でしかなかった。冷静になってみると、この発掘からまったく別の教えが導きだされた。われわれは現在、ホメーロス時代のギリシャには、二つないし三つの文明層が存在することを知っている。われわれの時代から非常に遠くに見えていたものが、よく見ると昨日の過去になっている。

ホメーロスのなかで区別しておかねばならないのは、人々の想像力を魅する箇所、幻想的世界の行動を語る箇所と、あまり語られないもう一つの箇所、つまりこの叙事詩の真の姿を映す箇所、それなしでは時代、環境、文明、そして詩人（作者）を誤解するおそれのある箇所である。幻想に属するものとして、戦場から巧みに拉致され、遠くに運ばれてしまう戦士たち、人の言葉をしゃべる馬<sup>10</sup>、ヴルカヌス神<sup>11</sup>の呼びかけにひとりでに駆け寄る三本足のかなえ<sup>12</sup>。また煙道を伝って降りて来たり<sup>13</sup>、鳥の姿で木にとまるアテーナイ神がある<sup>14</sup>。こうした細部に民衆信仰とか、時代の知識、あるいは作者の心性を認めるなら間違いもはなはだしい。それなら、十五世紀のイタリアがロラン（の歌）の事件<sup>15</sup>を、イタリア史の一場面と解釈してもよいことになるだろう。真のホメーロス、

---

<sup>6</sup> 1870年発掘

<sup>7</sup> 1874年発掘

<sup>8</sup> 1884年発掘

<sup>9</sup> ハインリッヒ・シュリーマン(1822 - 1890)による

<sup>10</sup> アキレウスの戦車を引く二頭の不死身の神馬バリオスとクサントス。『イーリアス』十九巻 408 - 417では、クサントスに戦場で死ぬことを予言されたアキレウスは怒る。これはホメーロスでは動物がしゃべる唯一の例

<sup>11</sup> 鍛冶の神ヘーパイストスのラテン名

<sup>12</sup> 『イーリアス』十八巻 373 - 378。鍛冶の神ヘーパイストスの道具は、彼の意のままひとりでに動く

<sup>13</sup> 『オデュッセイア』第六巻 20行では、扉が閉じられているナウシカアの部屋に「一陣の風のように」入り込むアテーナイ神の姿があり、二十二巻 201 - 207行では、求婚者たちを逃がさず全員殺戮するためきっちり閉め切ったオデュッセウスの館にいと簡単にアテーネー神は入り込む

<sup>14</sup> 例えば『イーリアス』第七巻 58 - 60では、トロイア側を応援するアポローン神とアカイア勢を応援しているアテーナイ神の両神が、秃鷹の姿を借りて樞の大木の梢に止まる

<sup>15</sup> シャルルマーニュの軍隊がスペイン遠征の帰途、サラセン軍（実際はバスク人）に脅かされたという伝説的事件は、十世紀の終わり、フランス最古の武勳

つまり今度は、面白がり楽しみたいませた子供相手ではなく、大人相手に、自分のすべての真摯な能力を働かせている者ということだが、こうした作者を求めるならば、その場は、アキレウスのもとに（総大将アガメムノンから）送られた（補償）交渉団を描く時、つまり有能で説得力のある交渉役としてのオデュッセウス、本当の忠実な友としてのポイニクス、イラつき、怒った戦友としてのアイアースを語る時である。規模、背景の違いはあれ、どんな国家元首、あるいは將軍の会見も、この場面以上の高潔さ、威厳をしめすことはないだろうし、また、どんな演説もこれ以上の重々しさや力強さをもって着想されることはあるまい。また例えば、プリアモス王が息子（ヘクトール）の遺体を引き取りたいとやって来る『イーリアス』の最終巻を見よう。いかなる現代の作家でもこの場面に、これ以上の感動と荘厳さの特徴を刻みこむことはできなかっただろう。

-（これらは）初期の作品とは無縁の部分、事後に付け加えられた部分ではないか！本当のイーリアス（「原イーリアス」Ur-Ilias）はヘクトールの死で終わっている、または、ヘクトールの死のすぐ後に起こるアキレウスの死で終わる、という考え方もある - というような説の議論にはまだ入ることはできない。ホメーロスのなかには事後に付け加えられた節 - あるいは巻まるごと - があるかもしれないと私も思っているが、これらの見分けは簡単だ。付け加えられた部分はわれわれになにも教えるものではなく、それは別の形式のもと、別の登場人物のもとで、既知のことが繰り返されている部分であり、過去のことについて、昔の表現が再利用されている部分である。つまり、すでにホメーロスには枕詞、婉曲表現、半句あるいは数行まるごとの使用ストックがあり、また言説の組み合わせ、比喩の選択肢さえ知られたものばかりなので、読者はそれに出会う前に予測が可能なのである。事後の付け加えでない部分とは、事態を進行させ、必要な結果をもたらす部分、状況を描いた部分、あるいは（登場人物の）性格的特徴を明らかにしている部分である。私は後で、詩をその原形に戻すとという口実のもとで結局は詩の最も美しい部分を失ってしまうことになりかねない批評的仕事の意味を説明するつもりだ。しかしまず、語らねばならないのは、それなしでは他のすべてが宙ぶらりんになってしまうような問題である。示したいのは、このギリシャ叙事詩は、すでに揺籃期から遠くにきてしまった人間の時代のものであるということ、この叙事詩が現しているものは始まったばかりの文明などではまったくないということである。

この詩がなにか原始的な感じを与える理由の一つは、これまであまり注意が払われなかったある種の演出のせいである。またもう一つは、われわれ現代の読者が持ち込んだ学説のせいである。文明にはある種のモノ、多少なりと貴重なモノが付きものだが、このモノについてはこれまで話題にならず、語り手によっても言及が避けられている。とは言っても、これらのモノが存在しなかったわけでは決してない。私はこれから、論駁できない証拠でもって、このモノがギリシャ叙事詩の遠い昔をさらにさかのぼっていること、またこのモノが、この時代の作者に知られていなかったわけではなかったことを示そうと思う。それが語られてこなかったのは、ジャンルの持つ法則によって禁じられていたからである。ジャンルの法則というものがあり、その法則を守らねばならないプロの詩人達がいた。古さの証拠と思われたものは、すでに洗練された文化と、歌い手に強制されていたあるしきりであった。

まず詩人達は、文字の術については決して語らないようにしている。しかし世の中ではるか以前から文字は使用されていた。小アジアからほど遠くないエジプトやアッシリアの宮殿の壁面は碑文で覆われていた。破壊と何世紀ものほったらかしの後に、われわれ（ヨーロッパ）の博物館はいま、毎年何百という碑文を収蔵し続けているのである。これはギリシャ世界を何か証明するものではない、という人がいるかもしれない。こうした主張は十年前だったら通っただろう。しかしクレタ島の発掘<sup>16</sup>によって、文字に覆われた無数のレンガの存在が世に明らかになった。一種類ではない二種類のこの書記法は、いくつもの固有名詞を永続させるための碑文文字ではなく、生活のふだんの使用のための日常的文字であることが判明した。その時期を紀元前五世紀に置いても、時代を誇張したことにはまったくならない。

しかしホメロス時代の詩人によって守られてきた（文字に関する）沈黙は完璧である。あらゆる言語において文字の術から生まれ、様々に用いられた隠喩表現さえ避けられている。ホメロスの言葉では、動詞グラポー graphô（書く）は、「搔く、引っ搔く」という意味にしか用いられない。作品に文字を介入させる機会がなかったわけではない。『イーリアス』には、いくつもの伝言、取決めが語られ、栄誉の観念はすべてのページにあるのに文字は一切現れない。

---

<sup>16</sup> アーサー = ジョン・エヴァンス Arthur=John Evans 卿指揮下のイギリス隊によるクノーソスの発掘は 1900 年より始まった

たった一度だけ、ベレロポンテースの有名なエピソード<sup>17</sup>では、詩人は文字への言及を避けることができなかった。プロイトス王の怒り<sup>18</sup>を蒙った勇者ベレロポンテースは、王から、リキア王へのある伝言を託される。託された者にとって内容不明のこの伝言には、この伝言を持って行った者を殺せ、とあった。困惑した語り手は、できるだけ漠とした表現を探し、「不吉な記号」、「死を招くしるし」と言うのである。(文字という)語そのものを忌避しようというこの気遣いは後の多くの注釈を生み出したが、これは文字の存在を示す語り手なりの証言である。

文字はしたがって知られていたのである。文字はギリシャ詩人の眼前に広がっていた。かれらはその存在を無視することはできず、それを語る機会は何度となくあった。しかしかれらはその語を発音するのを避けているのである。この決心はなにかふつうではない。

このいわゆる「文字の不在」から、ある高名な学派はどのような結論を出すに至ったか。これが熟慮詩と自発詩との区別の発端であった。現在、我が国の学派で重きをなしている文学理論の基盤はそこにある。このことについては後述する。ホメーロス詩に「存在しない」モノについての検討を続けよう。

文字同様、言及されていないモノに彫像、絵画がある。この沈黙はいつそう驚くべきことである。古代世界において信じられないほど多く生産された彫刻に、ギリシャ叙事詩の世界が無縁であったのは、どんなにたぐいまれな例外によるものなのか？ギリシャ、小アジアの植民地にはまだそれらがまったく導入されていなかったのだろうか？しかしクレタ島・クノーソスにある、ミノス王の宮殿とふつう呼ばれている建造物には、ホメーロスの、少なくとも六世紀前に位置させるべき時代の彫像や絵画の破片が見いだされている。『イーリアス』の冒頭、大神官クリュセースが何度となく雄牛やヤギのもも肉を捧げた祭壇で、クリュサ<sup>19</sup>、スキュラ<sup>20</sup>、テネドス<sup>21</sup>を治めるアポローンを呼び寄せる時、このよ

---

<sup>17</sup> 『イーリアス』第六卷

<sup>18</sup> プロイトス王は、ベレロポンテースに誘惑されたという王妃の讒言をまともにとった

<sup>19</sup> トロイア王国の町。『イーリアス』第一卷冒頭に登場するクリュセースの領地

<sup>20</sup> ギリシャ名は Skylla。シチリア・メッシナ海峡にあったとされる岩場の名。付近に怪物が住み、通る船を難破させた。隣接する大渦巻の名は Kharubdis。

うな場、このような祭壇で彼が指し示しているものが、木像であれ、石像であれ、また大理石の像であれ、そこに目に見えて実在する神体でないはずがないだろう。城砦に登ったアンドロマケーがアテーナイ神の神殿を開かせ、女神の膝の上に貴重なヴェールを広げるとき<sup>22</sup>、原文では曖昧だがこれ（アテーナイ神）は像であると理解しなくてはならないだろう。

しかし装飾技術、現在ならインダストリアルアート、と呼ぶものは例外としなければならぬかもしれない。この詩の語りの中に散りばめられている宝石や武器、あらゆる種類の装飾物についての神懸かり的な描写をだれも思い浮かべることができる。装飾技術が宗教芸術を差し置いて存在したなどというのはおかしい。盾をあれほど精巧に彫っていた人が神像に挑戦しなかったのだろうか？しなかったとはあり得ない。しかしこの二作四十八巻の中に、神の表象について明瞭に言及している部分の一つもないのである。

彫刻だけでなく絵画も『イーリアス』にはある。はっきりと露出しているわけではなく、隠され、暗示されているのである。ある種の枕詞は、「金冠の」ヘーレーとか「青衣の」ポセイドーンのように、自然な本来の現象として説明されがちだが絵画に関係しているように思える。アカイア勢を救おうと隠棲している場所から飛び出したアキレウスは、武器をもたずに幕舎の外を進んで行く途中、突然頭の周りに明るい金色の雲が広がる<sup>23</sup>。これはギリシャの壺の紋様となり、キリスト教の図像学にも伝わったが、太陽神がふつう持つとされている後光、あるいは光の冠にほかならない。

三つ目のさいごのモノ、これはつねに言及されないせいでなおさら目立っているモノであると言っておきたい。貨幣のことである。値は、『イーリアス』においては牧畜を業とする人々においてそうであるように、家畜の頭数で数えられる。良好な状態のふつうの大きさの釣り鍋は牛一頭。青銅の大鼎は十二頭。よい状態の甲冑には雄牛か雌牛九頭が払われる。仕事に慣れた奴隷の女にはたった雌牛四頭。もちろんこれを本物の値段表と考えてはならないだろう。私がただ示そうと思うのは、つぎの例外を除き、金属製の貨幣は存在しないらしい

---

この難所を辛うじて抜けるのが『オデュッセイア』十二巻目の主題

<sup>21</sup> エーゲ海、ダーダネル海峡の入口の近くにある島

<sup>22</sup> 『イーリアス』第六巻 297 - 304。トロイアの媼を連れてアテーナイ神に祈るのはヘクトールの妻アンドロマケーではなく、トロイア・プリアモス王の正妻、王妃ヘカベーである

<sup>23</sup> 『イーリアス』十八巻 203 - 216

ということ。ドラクマ<sup>24</sup>は銀鉱山同様、詩人には知られていないように見える。貨幣も銀鉱山も世界ではとても古いものだ、というのはすでに紀元三千年前のハムラビ法典にその名が見られるから。ある時はまた古い慣習に従って、たらいや鼎（かなえ）によって値が決められた。このような「貨幣」は実際に存在していた。しかしこれが、古人によれば銀の貨幣化が発明されたとされる国 - 富で名高いリディア王国のことだが - にもっとも近い国のことだとだれが思うだろうか？この王国（リディア）は、ちょうど同じ頃、カンダウレース<sup>25</sup>、ギューグース<sup>26</sup>、クレジユス<sup>27</sup>といった王の下でもっとも繁栄しているのである。奇妙なことに、銀貨や銅貨を知らないフリをしたホメーロスの詩はタラント<sup>28</sup>のことは何度も口にしている。しかし数えられているものが通貨なのか重さとしてなのかわからないままだ。パトロクロス追悼記念競技会でのイードメネウスとアイアースとの間の賭けはまだ「かなえ」と「大たらい」でなされている<sup>29</sup>。一方、この競技のエピソードが語られる二十三巻は新しい時代のものであることは確かだ。詩人が古い名称と古い通貨制度に縛られる伝統はこれほど変わっていないのである。

こうした様々な点について見られる「沈黙」にまして太古の風情を裏付けるものは演出である。つまり、フェヌロン Fénelon<sup>30</sup> が「原始の世界の愛すべき素朴さ」<sup>31</sup>という非常に美しい表現で呼んだ風俗の古さのことだ。イタケーの王、オデュッセウスは、自分の住居のもっとも奥深い場所で、妻ペーネロペイアを迎えることになった寝台をどのようにして作ったかを語る<sup>32</sup>。「中庭には柱の太さの繁った立派なオリーブの木があった。私はその周りに大きな石で、頑丈できっちりと閉まる扉のついた屋根付きの寝室を作った。それからオリーブの木

---

<sup>24</sup> 現代ギリシャの貨幣単位。古代ギリシャでは重さの単位（3.24g）

<sup>25</sup> 紀元前八世紀のリディア王。ヘラクレス王朝最後の王

<sup>26</sup> 紀元前七世紀のリディア王。ガンダウレースの王位を篡奪したとされる。メルムナース朝の始祖

<sup>27</sup> 紀元前六世紀のリディア王。ギリシャの賢者ソロンの友だったという伝説がある

<sup>28</sup> 金の重さの単位、あるいは金貨そのもの

<sup>29</sup> 『イーリアス』二十三巻 485 行目

<sup>30</sup> François Fénelon (1651 - 1715) 神学者、詩人、作家

<sup>31</sup> 『テーレマコス冒険』

<sup>32</sup> 『オデュッセイア』二十三巻 190 - 201 行

の葉っぱを削ぎ落とし、木の幹を根元から切り、それに青銅のたがをしっかりとほめ、平にしてから、穴をくりぬき、内側には牛革を張めぐらした」。ここまでは詩人は黄金時代の風俗に忠実である。だがなぜここで、寝台の美しさを引き立たせるための金、銀、象牙、それに緋色の布の使用を付け加える必要があるのか？「原始の世界の素朴さ」はどこへ行ってしまったのだろうか。『アイネーアース』のなかでヴィルギリウスが、善王エウアンデル<sup>33</sup>の粗末な小屋と木の葉の床を語った後で、息子パラスの玉虫色にかがやく甲冑と短いマントを描写するときも同じ種類の素朴さである。粗末な洞穴にテーレマコスを迎えるフランスのカリュプソ<sup>34</sup>が、そこで彼に、雪の白さより白いきめの細かい羊毛の上着と、金色に刺繍された緋色の長衣を見せるのも同じ趣向である。ホメーロスでもヴィルギリウスでも素朴さが様式なのである。これが当時の時代にふさわしい風俗なのだ。それは詩人がこのような描写を念入りに行う気遣い自体からわかる。友達と共に泉に洗濯に行くパイエーケス族の王女 ナウシカアー<sup>35</sup>を表すのに、もしこれが同時代の婦人の姿であり習慣であるなら、詩人はこれほど描写に淫することはないだろう。ナウシカアーの父の宮廷<sup>36</sup>は本物で、客人をもてなすため、デルフォイやオリンピアで行われるような遊戯を催すのである。現代のある批評家はこうした矛盾を除去することを提案しているが、そんなことをしたら、この作品の根底を成すものが直接傷つけられてしまうだろう。この詩の環境は、約束事と想像の古代である。詩人はこのことについてつねにわれわれに注意をうながしている。というのは、登場人物はみな神の系譜につながり、小さな島でも十二人を越える王<sup>37</sup>がいて、豚飼エウマイオスでさえ王家の血を引く<sup>38</sup>。彼らにはつねに神、神々の息子、神にも似た、といった枕詞がかぶさって

---

<sup>33</sup> 伝説によれば、トロイア戦争の六十年ほどまえにアルカディアからラティウムに移り住んだ。ヴィルギリウスの『アイネーアース』によれば、トロイアの滅亡後イタリアに逃れローマを建設したトロイアの王族アエネーアースを助けた

<sup>34</sup> 『テーレマコスの冒険』中の話

<sup>35</sup> 『オデュッセイア』六巻

<sup>36</sup> パイエーケス人の住む小島にある

<sup>37</sup> 『オデュッセイア』第八巻。パイエーケス族の島スケリエーには十二人を越える領主がいる

<sup>38</sup> 乞食に変装したオデュッセウスにエウマイオスが会うのは『オデュッセイア』の十四巻。自分の身の上話をするのは十五巻。この豚飼の父はシュリエー島の二つの町の統治者である



いるのである。一つ、ある言語事実が示していることがあるが、それは、詩はずっと以前から、「英雄」という物語的人物に慣れていることである。ホメーロスでは「英雄」(hērōs)という語は使われすぎて単なる敬称に落ちてしまっている(この語については本書の二部『語彙』のなかに語源の説明あり<sup>39</sup>)。慣用が語源的意味から遠くなっている様は、フランス語の seigneur (殿)、英語の lord (卿)と同じである。

『イーリアス』を翻訳したダシエ夫人 Mme Dacier<sup>40</sup> は、至る所に王侯貴族を見いだしているが、これは真実から遠いわけではない。現代の我が国の翻訳者<sup>41</sup>は、ギリシャとトロイアの戦士を、血の時代の現代人、野蛮と殺人の時代の粗野な人間にしているが、夫人は彼らと違い、この人為的社会の精髓を誤解しているわけではない。

『イーリアス』の英雄は高貴な生まれにふさわしい勇気を持っているだけではない。主な者にはそれに劣らない長所がある。弁舌の才能である。行動と弁舌、この永遠の対立命題はギリシャの文人にはなじみのものだが、すでにホメーロスに存在している。アキレウスはこの双方に秀でるため家庭教師ケイローン<sup>42</sup>によって育てられた、とわざわざ語られている。それはそうだろう。アゴラ(演説広場)の生活はすでに十分に組織化されている。詩人は我々を、あるときは元老たちの会議に、またあるときは人民会議に立ち合わせてくれる。作法はつぎのようなものである。聖なる人物である伝令は会議を招集し、言葉を言う権利を正当に有する印である笏杖を弁士に手渡す。すぐれた弁士はだれか、かれらの弁舌がどのような種類のものか、聴衆は前もって知っている。メネラーオスは、言葉は激しくおこりっぽい。オデュッセウスは、話し始める前は取るに足りない、ほとんど愚鈍であるかのように見えるが、一度立ち上がると彼に比肩されうる人間はいない。ホメーロスの言語には、この弁舌のいろいろな

---

<sup>39</sup> ブレアルによれば、hērōs の原義は「昔の人、祖先、半神」

<sup>40</sup> 1647- 1720。彼女のホメーロス作品の翻訳は第二次「新旧論争」のきっかけとなった。

<sup>41</sup> 今でも権威を持つホメーロステキストの注解・ピエロン版の出版は1869年から。同じ頃、詩人ルコントドリールは『イーリアス』『オデュッセイア』をフランス語に翻訳し出版している

<sup>42</sup> 神話では半人半馬の姿であらわされる。アキレウスに弁舌のほか、傷の治療法を教えた

綾を示す語彙がある。皮肉、ほのめかしを示す名前がある。みんなの前でしゃべる、という習慣はとても大きなもので、「長広舌をふるう」と「話す」の区別はもはやない。ペーネロペイアが自分の乳母と密談しようとするとき、用いられる動詞は「公言する agoreuô」である。この種族に生れつきのものである弁舌の才能は、さらに教育によって育まれる。ケイローンに育てられたアキレウスのように、テーレマコスやメンートルに、アイネーアースはアルカトオスによって育てられた。

さて、すでにルネサンス時代の学者に強い印象を与えた『イーリアス』の特徴を語らねばならない。この詩のいくつかの箇所には教育的性格があることに気付かないわけにはいかない。模範、手本となるべき人物像を詩人はなぞっているのである。二十二歌の戦車競争におけるネストールの演説、あるいは十九歌で、腹の減った部隊を戦いに連れて行ってはならないと言うオデュッセウスの長広舌、あるいはまたアガ멤ノーンの、話始めにはどんなに練達の弁士でも考えの糸を失ってしまうから話を中断するな、という頼みのように、明らかに新しい部分だけではない。もっと古い部分において、すでにアガ멤ノーンは完璧な将軍、総司令官の模範として表されている。自分の陣営の守備を固めるために細心の注意をはらい、自分の部隊の士気を維持するために将兵各々に適切な言葉を用い、必要によっては、指揮官としての苦勞の哲学を短くまとめることさえできる。彼はある負けいくさの翌日、弟（メネラーオス）に言う。「連中を元気づけてやれ。おのおのの名前とその親の名前を言って部下を元気づけてやれ。彼らを讃えろ。だが自慢してはだめだ。とにかく仕事をする事だ。この惨めな定めはゼウスから、われわれすべて生まれたときから押し付けられたものなのだ」<sup>43</sup>。これはほとんど格言詩、教訓詩である。

『イーリアス』に太古の感じを与えているものは、なかんずく戦闘場面である。そこには、歴史時代のギリシャではもはや用いられなくなった戦術、前七世紀、前六世紀のどんな文学作品にも、さらにはアルキロコス<sup>44</sup>、アルカイオス

---

<sup>43</sup> 『イーリアス』第四巻、アガ멤ノーンの閲兵の場面にこの言葉はない。「親の名を言ってそれぞれの戦士を激励する」場面は、アキレウスの戦線復帰前、ヘクトール率いるトロイア勢によって追いつめられ、海を背に戦うギリシャ勢を励ますネストールの言葉にある - 『イーリアス』十五巻 659 - 667

<sup>44</sup> 紀元前七世紀前半の詩人

<sup>45</sup>、テュルタイオス<sup>46</sup>などの戦争詩でも問題となっていない戦術がある。戦車のことである。逆にトロイア平原では広く行われていたと思われる騎馬の術は『イーリアス』では言及されない。

この戦車の出所はどこか？ルーブルや大英博物館の部屋を歩き回っている人は答えに窮することはない。これらの戦車は、多かれ少なかれ直接的に、エジプトとアッシリアの浮彫りから来ている。完全な一致だ。しっかりと一体化した二人の戦士が前部に立ち、一人は手綱を握り、もう一人は手投げやりを振り回している。昔のいさおしで頭を満たしている吟遊詩人は、これが昔の戦いのいでたちであると思っていたに違いない。こうした彫刻を彼の出身地でよく見たからか、近くのクレタ島や、キプロスで同じようなものを見つけたからか、あるいはそうしたものをうわさで知っただけからなのか、彼は名前のよく知られている英雄がこうして戦っていたと思っていたに違いない。こうした同一化はいつの時代にもよくあることだ。オリエントには今日でもなお、その多くの例がある。ペルシャでは、描かれたり、彫られたりした戦士の顔にはすべてルーステン Roustem とかフェリドゥーン Féridoun<sup>47</sup> という名がついているが、吟唱師にとってはこれらの浮き彫りが表しているのはアキレウスやグラウコス<sup>48</sup>あるいは、何度となく称揚された他の英雄のどれかなのであった。この同一化は、歌に古い神話的名残が混じるので一層容易になるのである。中世が、甲冑に身をかためた人によって擬人化されるように、ギリシャの英雄時代は、繫駕の馬車を操るこうした立った姿勢の戦士によって象徴された。現在でもなお見つかると七宝、宝石、沈み彫りに似た無数の小物にはすべて同じような場面が模写されている。これらはエジプト、あるいはフェニキアから商売で持ち込まれたものだが、詩人にとっては模写の原型であり証拠でもあった。

こういうわけで早脚で名高いアキレウスはふだん徒足で戦うのであり、またアガメムノン、メネラーオス、イードメネウスはエジプト風の英雄になったのである。この戦車の表現には見かけ以上の重要性がある。というのは、一対一の戦闘が限りなく続くという、この詩全体の調子がこれで決まったからである。お互いに助け合うとか、戦友を呼ばわることはない。正規で訓練された大部隊がお互いに作戦し合う時代、何百年もまえから、小アジアでは、アッシリ

---

<sup>45</sup> 紀元前七世紀から六世紀にかけての風俗詩人

<sup>46</sup> 紀元前七世紀の軍人・戦争詩人

<sup>47</sup> 双方とも中近東からロシアにかけての人名として残る

<sup>48</sup> ギリシャ側の英雄、王。ベレロポンテースの父

アやエジプトの軍隊は近くから見られ知られていた時代に、ギリシャ人とトロイア人の戦いは一連の騎士道的いさおしという形態で人々の記憶に定着したのであった。

ホメーロスの詩の真実を、比喩的事跡と一致するかどうかで証明しようとする、どの程度の誤りが生まれ、どんなひどい悪循環に陥るかが今やわかる。ホメーロスは戦士のいでたちを細かく長々と描写する。彼は戦士の武具のそれぞれの部品にまで注意を払って悦に入る。これが自分と同時代の戦士のいでたちだとしたら、そんな所にまで彼は注意を払わないだろう。現在のモノを記そうということは、文学では後世の思いつきである。詩人に望まれていたもの、詩に求められていたものは、勇者、昔の伝説的英雄であった。

さて『イーリアス』の文体に移ろう。規則正しく静かな歩調で歩む文体、最も俗なモノの前でも退かず、またいきなり思いがけないときに非常に高潔な思想まで持ち上げられ、それから極めて自然にふだんの足取りに戻る文体。この語りの様式の見事さの説明として、稀なる詩的才能を想定するのは十分ではない。形式がずっと以前から柔軟になってきていることも認めねばならない。詩人と伝統とが同時に必要とされているのである。詩人に負っているのは、語りの枠の大きさ、性格の真実性、行動の面白さ、全体の調和である。伝統に負うものは、詩の韻律、豊富な語彙、豊かな文法形態、人生のあらゆる行為のためのこなれた表現、変わることはない枕詞と定着した婉曲表現の使用である。このような伝統なくしてこれほどの規模の作品は考えられず、また詩人の才能なくしては、連作詩人の平凡な作詩に行きつくだけだった。

叙事詩の長期にわたる試作期間が先行していたにちがいない。その証拠として、絶えざる語りから流れ出る紋切り型の熟語があり、しきたりとなっているため気取りを感じさせないが、かなり奇妙な口調がある。戦いはふつう、「アレース（戦いの神）の狂騒」、死は「宿命の日」と名付けられている。肥沃な領地は「農耕の乳房」<sup>49</sup>、経験豊富な指導者は「山道」あるいは、「戦争の通路」を知る、と表現される。ホメーロスの名の下で有名になった枕詞、「魚影豊かな」海、「単蹄の」馬、「脚を曲げて歩む」牛。これらは詩的試行の長い過去から生まれた澱である。ここに、よく言われたような外界の無意識的な投影を見ては

---

<sup>49</sup> アンリ四世統治下、財務大臣を務めたシュリー公爵 1560 - 1641 の言葉に「農耕と牧畜はフランスを養う二つの乳房」という表現がある

ならない。見るべきものはむしろ、作詩の習慣から生じるような、あるいは記憶のすき間に見られるようなかすな思い出である。時にはこの枕詞は具合が悪いときに用いられることがある。兜の緒を語っている時に、「残酷に殺された」牛の話が出てくる。『オデュッセイア』の冒頭<sup>50</sup>では、アイギストスの犯罪<sup>51</sup>が想起されようとしているそのときに、彼は「非の打ちどころのない男」と呼ばれる。すり減った歯車のように、詩句がひとりでに滑ったのである。

つまり、ホメーロスが表現しているものは詩的時代の成熟期であり、あけぼののではないということだ。作品に用いられている形式が徹頭徹尾、六脚韻であるのを見ると、このことを疑うことはできない。ヴィラモヴィッツ Wilamowitz<sup>52</sup>が示しているように、ギリシャ語の様々な韻律法のうち、六脚韻というのは、最も厳格な規則下にある韻律法の一つである。そこでは詩人の自由に任せられているのはわずかな部分であり、長音、短音の場所はあらかじめ定められている。韻律の決まりもこれに劣らず厳格である。一つの長音が短音二つに等しいという原則はもちろんなにか勝手に決められたものである。子音の二連続は音節を長めるという原則もこれに劣らず習慣的なものだ。実際、民衆から出た詩に耳を傾けると、そこには様々な韻律、リズムがあり、長音化あり、短音化あり、音節全体の削除があつて、叙事詩の六脚韻の決まった韻律法からは遠いところに位置している。フランスの十二脚韻詩と同様、六脚韻詩は長い進化の結果であるように見える。

この韻律の理由それだけで、『イーリアス』は独立した小詩を並べたものだと考えるラックマン Lachmann の説を反駁するに十分だろう。言語の均一性は厳密にはあつたと考えられてよい。というのは、自分の方言にすべてを移し込んだ最後の吟遊師がいたかもしれないのだから。しかしはるか昔から記憶にゆだねられ、人々の賞賛によって固まった作品を、たった一種の同じ韻律にはめ込もうとする韻律師がいたとは考えにくい。

ホメーロスの言語はそれでも驚きを引き起こすように作られている。いたる所で発見がなされ、ギリシャ語のさまざまな方言のサンプルが増えて来ているが、ホメーロス方言というのはまだどこにも見つからない。ホメーロスの言葉

---

<sup>50</sup> 第一巻 35 - 38 行

<sup>51</sup> 不在のアガ멤ノーンの妻、クリュタイムネストラと通じ、トロイアから凱旋して来たアガ멤ノーンを殺すが、アガ멤ノーンとクリュタイムネストラの子、オレステースに殺される。第三巻 193 - 198 行

<sup>52</sup> 1848 -1931 ドイツの古典語学者

の音声学的不安定さ、文法形式の不統一に言語学者は面喰らって来た。この不規則性を説明するため様々な説が出された。しまいには吟遊師は、その聴衆集団によって詩の言葉を変え、最終編集のときにこうした絶えざる入れ替えの跡が残ったのだと想定された。ありえない説明ではない。しかし言うておかねばならないのは、この入れ替えのしきたりは古くからのものだったはずであり、この入れ替えによって一種の混合言語が生まれ、吟遊詩人たちがそこから自分に都合のよい形を選び取ることができていたということである。詩はこの混合言語でつくられたのであり、この言語がこの叙事詩の言葉だった。同じようにして我が国のトルーバドゥール（吟遊詩人）は二世紀の間、カタロニア語、プロヴァンス語、またイタリア語の形が見られるリモージュ語（南仏語の一つ）で作詩した。

次のことも忘れてはならない。ディガンマ<sup>53</sup> のことである。これは十八世紀、ベントレー Bentley<sup>54</sup> によってホメーロスのなかに推定され、これまで正直な学者を大いにとまどわせてきた。彼らは（語形、韻律ほかの説明の）あらゆる場合にこれを便法としたのである。ディガンマとは、詩をつくるにあたって、*ergon*（仕事）に対して *wergon* というように、ある種の語頭に想定しなくてはならない *v*（英語の *w* の音）の文字のことである。『イーリアス』のそれぞれの歌の時期を確定する方法がこの文字にあると考えられた。しかし研究の進歩によって、この方法では不十分であることがわかった。この文字があるべきところすべてにこれを再現することは作詩法では許されないだけでなく、この文字はそれだけでは古い時代の証拠とはならないらしいのである。ある方言はこのディガンマを四世紀まで保持した。このしるしを信用しなければならないとしたら、ホメーロスより古い時代の碑文があることになる。というのは、ホメーロス詩では、いまにも消滅するばかりの音のように、それが用いられたり用いられなかったりしているとき、こうした分節を示すべく非常に確かな碑文があるということだからだ。

私は次のこともぜひ付け加えておきたい。つまり、ホメーロスのテキストが絶対的な確実さを持つと決して考えてはならない、ということ。人口に膾炙したこの詩には、必然的に新語が混じり込んだり、ある節が改変されたり、また

---

<sup>53</sup> ギリシャ文字 *Ϝ* が二つ重なったもの。現在は **Ϝ** と表記する。六脚韻の韻律確定のときに存在が推定された

<sup>54</sup> リチャード・ベントレー 1662 - 1742。イギリスの教育者、古典語学者

別の節は消えてしまっている場合もある。この点に関していくつか意義深い警告が存在する。プラトンは、われわれの時代まで到達した版には欠けている詩句を『イーリアス』から引いている。エジプトで見つかったパピルス文書にはかなり多くの異文がある。ホメーロスの言語はしょっちゅう若返っていたに違いないのだ。しかし留保はある程度必要だ。この懐疑主義を押し進め、現在のあるドイツ人の批評家のように、おそらく原テキストにあった詩句は一行たりとわれわれは持たない、とまで言うてはならない。

今度は、なぜ現代の批評家がホメーロスの歌をあまりに遠い過去にさかのぼらせようとしたのか、その理由の二つ目について述べたい。この理由はわれわれのなかにある。われわれがそのなかで育った文学理論、とくに、「民衆叙事詩」Folksepik という考えから生じている。この種の考えほど魅力的なものはない。しかしそれは真実でなくてはならない。

こうした考えを流行らせた最初の人にはヴォルフ Wolf ではない。彼の前に、イタリア人のヴィーコ Vico<sup>55</sup>、デンマーク人のツォエガ Zoega<sup>56</sup> がある種の巧みな言葉で世に紹介している。

この遠い時代では、と彼らは言う、文化はすべての人にとってほぼ同一であった。ある者が知っていることは他の者も知っていた。おのおのの中にすべての民族の合一された力が生きていた。したがって同じ歌がここあすこと沸き上がった。最初の歌い手が見いだしたものを、別の歌い手が引き継ぎ、発展させ、さらに美化した。歌は言語のようなものであり、すべての人間の共同作業である。人民全体がホメーロスだった。それから個々の作品は融合し、全体を構成した。最後に、「組み立て人」ホメーロス（この名は、まさにそういう意味であった、と付け加えられた）がすべてを収集した。生き残る価値のない作品は消え、忘れ去られた。

ヘルダー Herder<sup>57</sup> がその熱狂を吹き込み、ヴォルフ Wolf が学識の権威で裏付けたのはまさにこの考えである。こうした見方になにか魅力的なものがあることは繰り返して言うが、今日、民衆詩というものの真の性格がどのようなものであるかは、ツォエガ Zoega やヴィーコ Vico の時代よりもっとよく知られて

---

<sup>55</sup> ジャンバチスタ・ヴィーコ 1668 - 1744、ナポリの歴史・言語哲学者

<sup>56</sup> ゲオルグ・ツォエガ 1755 - 1809 主にローマで活動した考古学者

<sup>57</sup> ヨハン・ヘルダー 1744 - 1803。古典的理想に対し民衆の精髓を鼓舞する彼の理論は、ドイツの文学運動『疾風と怒濤』のさきがけとなった

いる。

まず民衆詩は短い。二十四巻の構成が民衆詩からなるとするとは気違い沙汰である。一連の独立小詩を想定するにしても、民衆詩神の程度を越える。

民衆の口から出て来た本当の歌を読んでもみるがよい。たとえ少し手を加えられたものであっても、パーシー Percy<sup>58</sup> やブレンターノ Brentano<sup>59</sup>の選集で読んでみるとよい。民衆の詩の言葉はぎくしゃくして、不明瞭であり、物語風なところはちっともなく、場面描写はもっとひどい。ところどころに短い対話と、まったく不適當な細部がある。民衆詩には、探そうとしなくても感動的な語は見つかるが、長く筋が通った場面は見つからない。ふつう民衆詩に一番欠けているものは脈絡である。一つの語、一つの暗示、一つの母音の繰り返しで、民衆詩は軌道から外れてしまう。ホメロスの詩はまったくこの逆である。語りの一貫性、ときどき秀でた知性の日の光のようなものに彩られる思考のこの不変の落ち着き、こうしたものを民衆詩に認めることはできない。これを民衆詩に求めるのは不当であろうと付け加えておきたい。

『イーリアス』の作者に先行する者がいなかった、ということを感じる者はだれもいないだろう。というのは、彼自身、メレアグロス<sup>60</sup> とか、ベレロポンテスのような他の英雄の讃歌である（古い）詩に言及しているからだ。一方同じように、『イーリアス』には加筆がない、ということもほとんどあり得ない。主人（聴衆）の側に自分の場所を確保したいという願望、とくに現地の英雄が讃えられたら喜ぶはずの聴衆を前にしたとき、こうした願望に逆らうには、吟遊師にとってよほどの自己否定の気持ちが必要だったろう。イードメネウスの武勲にあてられた巻<sup>61</sup> はクレタ島では歓迎された巻だったと思われる。しかし言うておかねばならないのは、この部分は、どこから出てきたかわからない数枚が適当に原文に挿入されるように、事後、当てずっぽうにこの大叙事詩に加えられたのではないということである。これらは全体がちゃんと頭のなかに

---

<sup>58</sup> トーマス・パーシー Thomas Percy 1729 - 1811 イギリスの宗教人。1765年「古英詩集」を出版

<sup>59</sup> クレメンス・ブレンターノ Clemens Brentano 1776 - 1842 ドイツのカトリック詩人、作家。1776年から1842年にかけて、民謡集の編纂に協力し出版した

<sup>60</sup> 初穂の欠礼に怒った狩猟の女神アルテミスは、オイネウスの畑を荒らすため、白い大猪を送る。オイネウスの息子メレアグロスはこれを退治するが、その後女神のたたりを蒙る。『イーリアス』九巻 538 - 599

<sup>61</sup> 『イーリアス』十三巻



あるプロの人たちによって作られ、本体にある場所を占めるように構成された。こうしてみればじめて（それぞれの部分のあいだで）言語と韻律が相似し、さらに文体が同一の様相をしているわけがわかる。また部分部分が巧みな準備、いかにも真実らしい記憶の想起でもって、本体に接合されていることについては、こうした歌い手の腕前のせいにすることもできる。

『オデュッセイア』は船乗りの詩、『イーリアス』は兵士の詩と呼ばれたことがあるが、この表現が正しいとは思われない。少なくとも説明を加える必要がある。この詩には民衆は不在である。というよりむしろ、言及されたとしても、半句で簡単に、しかも「人々は死んで行った」olekonto de laoiと言われる以外の注意は払われていない。この長い詠唱の対象である聴衆はとにかく、忙しくない聴衆である。この聴衆は、登場人物の系譜だけではなく、弁士の演説、人の手から手へと移り渡った笏杖の話、何世代もの英雄の所有物であった兜の話を聴くヒマがあった。面白がり、楽しみたい聴衆なのだ。この聴衆は一体どういうものだったのだろうか？

この聴衆がどんなものだったかというイメージをつくることは可能である。それを描いたものをホメロスに三度まで見いだすことができるからだ。まず、ピュロスにあったメネラーオスの宮廷<sup>62</sup>。それから、パイエーケス人のところのアルキノオス<sup>63</sup>の宮廷<sup>64</sup>。最後は、イタケーのテーレマコス<sup>65</sup>の宮廷である。詩人はそのたびにそこに注意を向け描写して悦に入る。つまり、場面を彼はよく知っていて、デーモドコス<sup>66</sup>とかペーミオス<sup>67</sup>の姿で表されているのは詩人自身である。詩人は惜しみなく聴衆へ賛辞を送る。彼によれば、聴衆は笏杖を手にする王以下の者ではない。集会を主宰する者は賢い王妃アレーテー、またの名、アルキノオス王の有徳の王妃、あるいはまたピュロスの女王、神々しいヘレネー自身である。長い列をつくり、料理が山と積まれた食卓の席につく一方、神

---

<sup>62</sup> ピュロスにあったのはネストールの居城である。メネラーオスの居城はスパルテー。前者の描写は『オデュッセイア』の第三巻。後者は第四巻にある

<sup>63</sup> 王女ナウシカアの父王

<sup>64</sup> 『オデュッセイア』七巻

<sup>65</sup> 『オデュッセイア』の後半はここが舞台

<sup>66</sup> アルキノオスの宮廷の名高い盲目の吟唱師

<sup>67</sup> テーレマコスの宮廷の独修の歌い手。『オデュッセイア』第一巻に登場。十二巻では殺戮中のオデュッセウスに懇願し、命を救われる

から靈感を受けた歌い手が神々と英雄たちの出来事を語る、世の中でこれほど大きな喜びはないのである。

これは「教養のある」（この語を用いることができるとして）聴衆である。昔の物語への言及もすぐさま理解される。登場する人物の名を聴衆に言うだけで十分なのだ。聴衆はかなりの開明的精神の持ち主である。（神々の住む）オリンピアの話が好きだとしても、それをそのまま真っ正直にとるわけではない。詩人は不死身の神々をだしにひそかに楽しむことさえできるのである。詩人は新種の話を出しても許されているのだから。例えば、詩人がゼウスと（その妻）ヘーレーとのいさかきを語るとき<sup>68</sup>。あるいは女神のアプロディテーが、アレースと同衾したところをどんな工夫によって捕まえられ、イデー山の住人（神々）すべてが大喜びしたかを歌うとき<sup>69</sup>。あるいはまた、ディオメーデースによって怪我<sup>70</sup>を負ったヴェニヌス神（アプロディテー）の嘆きを小馬鹿にする、手に負えないアテーナイ神のからかい、「父、ゼウスよ、私があなたにこう言ったら気に障るかしら？ - キュプリス<sup>71</sup> はたぶんだれかアカイアの美女（ヘレネーのこと）を引っ張り込み、なんとまあ、自分の好きなトロイア人たちの方へ連れて行こうとして、彼女の金の留め金に手を回して可愛がっているときに。（キュプリスは）怪我をしたようですよ。」<sup>72</sup>と語るとき。

くちさがないが、卑俗でも下品でもない。みやびの雰囲気が全体にただよっている。この詩の冒頭<sup>73</sup>で二人のギリシャ軍の長<sup>74</sup>が交わし合う罵りの言葉から物事を判断してはならない。彼らの中で罵倒し合っているのは「怒りの神」である。どんな国でも、怒りは弁舌を一、二等下げてしまう。しかし、数刻たつと、苦しみに満ちているにもかかわらずアキレウスは、ブリセーイス<sup>75</sup>を引き取りにやってきたアガ멤ノン側からの使者たちに公正な言葉をかける。「ようこそおいで下さった、伝令、ゼウスの使者、それに戦士の諸君。さあ近う寄ってくれ。あなた方が悪いのではない」<sup>76</sup>。そしてアキレウスは彼らを食卓に招

---

<sup>68</sup> 『イーリアス』十五卷冒頭

<sup>69</sup> 『オデュッセイア』第八卷 266 - 343 行

<sup>70</sup> 嫉妬する女神アテーナイの差し金による

<sup>71</sup> キプロス島の女神。アプロディテーのこと

<sup>72</sup> 『イーリアス』第五卷 421 - 425 行

<sup>73</sup> 『イーリアス』第一卷冒頭

<sup>74</sup> アガ멤ノンとアキレウス

<sup>75</sup> アキレウスの女虜囚

<sup>76</sup> 『イーリアス』第一卷 334 - 336

く。一方、今しがた傲慢で不当であったアガメムノーンは、後にまったく違った日の光の下に姿を現す。「アルゴス勢の皆の者、聴いてくれ。私の言葉をしっかり覚えてくれ。ゼウス、大地、太陽、それに、偽りの誓いを罰する地獄のエリニウス神にわしは誓う。決してわしの手はブリセーイスに触らなかった、決してわしはこの女の寝床には近づかなかった。わしの幕舎では女は敬意をもって扱われた。もしわしがウソをついたら、神々が、偽誓の罰としての不幸災難でわしを打ちひしいでくれるように」<sup>77</sup>。

育ちのよい人間の背負い合う関係が戦争によって断ち切られることはなかった。敵との関係も礼節と信義の掟によって定められていた。ヘクトールとアイアースは激しく戦うが、夜が来ると引き分けられる。「もう十分です、お二人とも。これ以上戦いはおやめなさい。お二人をゼウスは同じように可愛がっておられる。お二人の剛勇無双はわれわれ皆知っております。もう夜が来ました。夜には従ったほうがよい。」このように伝令（イーダイオス）が言うのである<sup>78</sup>。するとアイアースが言う「今度はヘクトールが話す番だ。向こうが挑んだのだ。彼が先にやめるなら従おう」

そして二人が贈り物を交換した後、「いつかトロイア勢、アカイア勢のうちでこう言われるだろう - われわれは激しく反目し戦った。そして仲直りし、友として分かれたと」<sup>79</sup>。

ヘクトールが中世の典型的人物の仲間入りしたのはおそらく偶然ではない。思うに『イーリアス』のこの美しい場面の記憶は、翻訳や模倣作によって我が国の騎士道物語まで浸透したのである。

『イーリアス』にもっとも現れる感情は愛と栄光である。あらゆる戦士は後世の者が彼らの面倒を見ると確信している。「将来やって来る者がお前達のことをなんとというか考えて見ろ」この思いは何度となく繰り返される<sup>80</sup>。ヘクトールがもうだめだと自覚した時、最後の思いは自分について人々が持つだろう記憶についてである<sup>81</sup>。名誉の感情は近代的なものだと言った人がいる。しかしこれ

---

<sup>77</sup> 『イーリアス』第十九巻 258 - 265。要点はすでに第九巻 131 - 133、273 - 275 でも簡潔に言われている

<sup>78</sup> 『イーリアス』第七巻 279 - 282

<sup>79</sup> ヘクトールの言葉。第七巻 300 - 302 行

<sup>80</sup> 例えば『イーリアス』十五巻 661 - 666 行。ネストールの将兵激励の言葉

<sup>81</sup> 『イーリアス』二十二巻 99 - 110 行。あるいは 297 - 305 行のヘクトールの独白

は間違いだ。名誉の感情を名付けるための表現がまだ見つけられておらず、言葉が探されていたというのが本当である。アイアースは言う。「おお、皆の者、もののふであれ。戦さではお互いに恥の気持ちを持って」<sup>82</sup>。

妻アンドロマックの懇望にヘクトールはこう答える - 「そういうことはすべて気にしておる。しかし恥を感じるのは、トロイアの男たち、それに長いヴェールのトロイアの女たちに対してだ」<sup>83</sup>- ディオメデースは思わずこう言う「そんなことをしたら、そのうちわしの敵（ヘクトールのこと）は、テデウスの息子（自分のこと）が船に向かって一目散に逃げた、と勝ち誇るだろう。そんなことになるくらいなら、大地がわしの下で裂けてくれたほうがよい」<sup>84</sup>。

これがまだ教養のない民族の思いであり、感情であろうか。お互いに不遜な挑戦の言葉を投げ合い、双方とも、なによりもまず誇りの掟をかかげた羽飾りを付けた戦士たちのうちに、私はむしろ騎士道の最初の現れを見るのである。近代によって付け加えられた新しい要素である愛の感情を除くと、タッソー Le Tasse<sup>85</sup>の登場人物を思わせるものがある。

ところで、この詩のもっとも不思議な点を言わねばならないとしたら、私は躊躇することなく、それは女の描き方にあると言っておこう。まず、ペーネロペイア<sup>86</sup>。あるイギリスの批評家の言うように、現代のもっとも上手な作家でもこのキャラクターをこれ以上うまくは描けなかつただろう。夫が戻って来たのに彼女は、十年の不在の後の彼を識別できない。彼女は慎重な女、思慮深い主婦、家のためにひたむきな母として行動しているのがわかる。アンドロマックは二箇所しか現れない<sup>87</sup> が、この人物像は忘れがたい。彼女が夫にかける言葉<sup>88</sup> は、一人の妻がこれまで自分の心から絞り出した言葉のなかで最も感動的である。また例の見事な性格のヘレネー、『ファウスト』の作者はこの性格に驚嘆し、

---

<sup>82</sup> 『イーリアス』十五巻 561 - 562。同じ言葉がアガメムノーンの口からも発せられる - 第五巻 529 - 530

<sup>83</sup> 『イーリアス』第六巻 441 - 442 行

<sup>84</sup> 『イーリアス』第八巻 148 - 150

<sup>85</sup> 1544 - 95。イタリアの詩人。初期の作品『リナルド』は騎士道叙事詩

<sup>86</sup> イタケーの女王、オデュッセウスの妻。テーレマコスの母

<sup>87</sup> 実際は三箇所に現れる。『イーリアス』第六巻のヘクトールとの会見の場面と第二十二巻、アキレウスに倒されたヘクトールを城壁の上から嘆く場面、それに二十四巻、プリアモス王がアキレウスから購ってきた夫ヘクトールの遺体の頭をかき抱いて泣く場面

<sup>88</sup> とくに第六巻 407- 439

彼の永遠の女性像の一つに加えた。彼女はトロイアの女になったが、休戦が成立したことを知らされると、じっとしていることができず、行って城壁の高みからギリシャ軍の司令官たちを見、彼らのなかに、自分の前夫<sup>89</sup>を見る。彼女はやさしい欲求に満たされ、糸巻きを捨て、目を涙で濡らして砦の上に駆けつける。この同じヘレネーは『オデュッセイア』にも現れる。彼女はすでにトロイアの人たちから離れ、町の滅亡を予感している。一人彼女だけが町のなかに引き入れたばかりの仕掛け（木馬）に何が隠されているかを見抜いている。そして空威張りにも似た大胆さと子供っぽい心から - これは木馬のなかに隠れている兵士の心胆を恐怖で縮み上がらせるのだが - 、彼女はその周りを回り、ギリシャ軍の将兵の名前を彼らの妻の声色をまねて呼ぶ<sup>90</sup>。しまいには、彼女はついにスパルタのメネラーオスの側において、愛され敬われて、自分の生涯の出来事、夫の誇りを語って楽しむ。彼女はゼウスの立派な娘であり、まもなく神々の仲間入りをするのである。こうした彼女の特徴すべてがおそらくかならずしも同じ作者によるものではない、ということは分かっているが、これは、ホメロス時代のギリシャが「神々しいヘレネー」をどのように考えていたかを表しているのである<sup>91</sup>。

この巻を作者が、聴く準備の特別よくできているどのような聴衆のために制作したのかということを考え始めなくてはならない。偶然集まった聴衆、単なる通行人の群がりというのは論外だ。このような条件では、歌い手の歌が生き延びることは決してなかったであろう。実際には、吟唱師はエリートから成る聴衆、アリスターエス（優れた者たち、貴族）と呼ばれていた人々が相手である。舞台がスミュルナあるいはミレートス<sup>92</sup> だとしたら、それは旧家の子孫、家系の先頭に英雄あるいは神の名が書き込まれている人たちだ。そして彼らと並んで、商業や海上遠征<sup>93</sup>で富が蓄えられたこうした国では当然だが、戦いの指導者たち、海賊 pirates（この語には敬称的意味しかない）、緋色の布と羊毛の卸商人、エジプトに小麦、西の国には鉄や錫を求めて船をくり出す船主、あるいは艀装業者が想定される。雑多な聴衆だが活力があり、神に愛でられている民族にふさわしく聡明で好奇心に満ち、芸術を好む聴衆だ。そして、詩人に描

---

<sup>89</sup> メネラーオス

<sup>90</sup> 第四巻 276 - 280

<sup>91</sup> ブレアルはこうした女性に王女ナウシカアを数えていない

<sup>92</sup> 双方とも小アジアの西端の町

<sup>93</sup> 海賊行為？

かれたさまざまな聴衆の類似点だけを見てみると、アレーテ王妃（アルキノオス王の妻）の代わりに、古い伝説の魅力をすでによく知っているミレートスの婦人、あるいはスミュルナの婦人を考えることができる。このとりわけ特権的な聴衆が、最初にアキレウスの怒りの歌あるいはオデュッセウスの彷徨の歌を詩人自身の口から聴くという、世にもまれなる喜びを持つことができたのである。

こうした集まりがなにか公的な祝祭と関係していた可能性はある。『イーリアス』と『オデュッセイア』がアテーナイまで到着すると、その詠唱をアテーナイ神の祝祭<sup>94</sup> に行うことが法律で定められた。この位置はこの二作品の生まれた国で置かれていたに違いない位置と類似している。この詩の長さからして、祭りは何日間も続いたことも想定される。

この創作を通してなにか本当の出来事がまだ垣間みられるのではないか、実際の記憶、歴史的事実が『イーリアス』の土台となっているのではないかということがつねに問われてきた。このことについては、ホメーロスは現実にトロイア戦争に参戦し、登場する人物を個人的に知りえたと思定したヴォルテール<sup>95</sup> から、この話は太陽と雲海との戦いが核になっているという考えに傾いているマックス・ミュラー Max Müller<sup>96</sup> まで、これまであらゆる仮説が出されてきた。登場人物の名前は詳細に分析され、他の民族の英雄や神と比較された。この作業から十分説得的なものはないにも生じていない。多くの歴史的、地理的、神話学的調査と研究のあと、ある現代の学者 Niese 氏<sup>97</sup> は落胆のあげくに、トロイア戦争は単にホメーロスの創作かもしれないという考えを述べたが、このあきらめは行き過ぎである。アジアの強大な王国にたいするヨーロッパの大遠征といった、実際の出来事がこの作り話の根底にあるのは確からしい。この出来事の周りに集まった神話や人物が結晶化したのだが、人物のほうは数世紀も前から人々の想像の中に存在し、他の印欧語族の人々のあいだでは違った名で見られるのである。すべてがまったくのフィクションではないらしい。詩人は、トロイアの地形をぼんやりとは知っている。というのは、彼は平原の様々な場所

---

<sup>94</sup> 現在のオリンピックの始まり

<sup>95</sup> 1694 - 1778

<sup>96</sup> 1823 - 1900

<sup>97</sup> (?)

を名付けているし、町の近くを流れている温水の源泉のことを語っている<sup>98</sup>。アキレウスとパトロクロス<sup>99</sup> が共に眠る墓は、だれもが知る記念碑として、何度も言及される。また、ギリシャ勢が自軍の防御のために海岸につくった防壁を、後に神々が、恐れからか嫉妬からか、大きな自然災害を起こして破壊してしまうが、この防壁にはなにかこの土地の伝統の名残がまだ認められる。まったくの空想的状況の中ではあるが、なんらかの現実みを帯びたように見える人物、それは（トロイアの）プリアモス王である。彼は莫大な富と壮大な宮殿、百人の妻と五十人の息子と五十人の婿をもつ東洋風の本物の君主である。この君主は、一夫一婦制がきまりであるギリシャ世界、また、浮気はよくあるが、正妻は一人というギリシャの神々の世界とは対比をなしている。

ホメーロスの読者をまごつかせるものは、詩人とその祖国、その時代についての言及が皆無であることである。われわれは『オデュッセイア』のある登場人物<sup>100</sup> のように、こう詩人に訊いてみたいものだ。「お前の氏素性はなにか、どこからおいでか教えておくれ。お前はおとぎ話にあるように、櫛の木、あるいは石から出て来たわけではないでしょう」。このさわがしい数百年の間、優位を争った多くの民族のうち、どれも厳密には言及されていない。まもなくギリシャの町を従えようとしていたリディア人<sup>101</sup> については、ホメーロスは名前を言わない。それについて語らねばならなくなると、メオニアという古い語を探してくる。カリア<sup>102</sup> 人については、彼らの言葉は野蛮と言うだけである。フィリジア<sup>103</sup> 人は、トロイアと同盟を結んでいる事実から言及される。フェニキア人はこすい商人として引かれる。そして、これだけなのだ。ギリシャ人の名前を言わねばならなくなると詩人はペラスゴイとか、ダナオイ、アカイオイ、アルゲイオイのような、定義のはっきりしていない（古い）語彙を用いるのである。彼は現在から逃れようとしているように見える。

---

<sup>98</sup> 『イーリアス』二十二巻 149 - 150 行。スカマンドロス河の源泉の一つ

<sup>99</sup> アキレウスの親友、アキレウスの武具をつけて戦うがヘクトールに殺される - 『イーリアス』第十六巻

<sup>100</sup> 十九巻 162 - 163。ペーネロペイア

<sup>101</sup> リディア王国最後の王クレジュスは前六世紀、イオニア地方を支配下に治めた

<sup>102</sup> 小アジアの地方名、リディアの南隣国

<sup>103</sup> フィリジア王国はリディアの東隣国

こうした沈黙を理由にしてホメーロスという人格を、彼の時代や環境の外に置くわけにはいかない。ホメーロスの詩は同一の国で、同時代の頃、そして同じような状況のおかげで花開いた。この状況は歴史が記憶できる最もすばらしい知的開花をもたらした。この詩は、タレース<sup>104</sup> がイオニア哲学を始めた時代、ヘカタイオス<sup>105</sup> が最初の歴史の本を書いた時代、アルクマン<sup>106</sup> やミムネルモス<sup>107</sup> が叙情詩を創った時代からそれほど遡るものではないはずだ。このような人たちより文体の簡潔さを欠くが、これは時代が遠い昔にさかのぼるからと言うより、むしろジャンルの違いによるものだろう。ホメーロスはこうした文学的生産時代の一、二世紀前に置かれようとされたことがある。しかしこの間隔はありそうにない。このような偉大な生産のあとでこうした休耕は異常だろう。口承による伝承は作品を改良するよりはむしろ、損ない変形させることが知られている<sup>108</sup>。もし『イーリアス』が二世紀もの口承研修期間を経なくてはならなかったら、いまのわれわれに到達している原文に見られる以上に、この作品には埋め草、繰り返し、合わない枕詞、また、あやしいエピソード、あきらかに加筆された部分が見られるだろう。

疑問視はされているが、ある情報がある。これによれば二つの叙事詩はピシストラトス<sup>109</sup> のころ<sup>110</sup>、アテネで収集され、文字で定着されたというのである。この情報の価値がどのようなものであれ、だいたいこの時期を認め、容認する最大限の百五十年間の口伝による伝承期間を想定するならば、われわれは、アジアのギリシャ植民地が繁栄の真っ只中であり、独立をまだ享受していた時代に行き着く。これらの数字を最大限認めるとしたら、ホメーロスの時代を、蓋然性をもって推定できるのは紀元前七世紀の始めのころであることを繰り返しておく。もっと遡り、八世紀、九世紀あるいは十世紀までも考えるのは、すでに十分発展している文明の証拠のすべてを認めないことになる。形式のわずかな違いを除き、家族、法、モラルといったギリシャ社会の本質的構成要素は

---

<sup>104</sup> ミレートスのタレース。前七世紀から六世紀にかけての科学者、哲学者

<sup>105</sup> ミレートスのヘカタイオス、イオニアの地歴学者、前六 - 五世紀

<sup>106</sup> スパルタの抒情詩人。紀元前七世紀

<sup>107</sup> 紀元前七世紀のギリシャ詩人

<sup>108</sup> インドの『ヴェーダ』は口承が伝統であり、改変されることなく正確に伝達された

<sup>109</sup> 前六世紀、古代ギリシャの僭主。ソロンのいとこ

<sup>110</sup> 561 - 528



すでにホメーロスにある。原始的『イーリアス』Ur-Ilias の再構成論については、ここはその試みを議論する場ではない。これについては五十年前から、多くの明敏さと学殖が費やされた。ひとつ言いたいことは、一般的に、手直して古い叙事詩が得るものはないように見えるということ。エピソードをはぎとられ、少数の登場人物のあいだで狭められ、まっすぐにその終末に至る行動では、その魅力、すなわち役者の多様性とコントラスト、自在な語り、充実した詩的感興が失われる。最近ある批評家は巻数を四巻に、登場人物の数を六、七人に減らした。その結果、この豊かな詩全体が枝打ちされ、裸になってしまった。風俗を野蛮にすることで良いことをしたと思っている人がいる。アキレウスは、情にほだされる魂をもつのではなく、敵の心臓を自分の犬に食わせる。もしこうしたものが初期形の大団円であったのなら、いったい誰がその逆に変えようとしたのであろうか。これらは正に石の時代の風習なのだ。この詩を、許しの場面とトロイア婦人の嘆きで終わらせた古代のイオニア人はもっと人間的であった。

私の示した時代に据えられると、なかば博識の作品として『イーリアス』は不可解な作品ではなくなる。神秘傾向の人は、蓮がインドの池から生まれるように、この詩が人々の意識から完成された状態で生れてくるのが残念かもしれない。しかし明晰な思想を愛する人は、『イーリアス』詩がすでに文化と芸術の時代であった時代に、美しい創作に興味を持つ人々、伝説や詩歌の愛好家のあいだで創られたと知って、この詩を低く評価しているわけではないのである。様々な時代、様々な民族の叙事詩のなかで『イーリアス』が一番であり、最も美しい。しかし『イーリアス』はそれら民族の叙事詩と違うものではないのである。

訳注 工藤進